

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	林 志妍 【人間発達科学専攻 2010年度生 2019年3月単位修得退学】	要 旨
論文題目	韓国の就学前カリキュラムにおける「プログラム」に関する研究 — 「生態幼児教育」の実践を手掛かりに—	本研究は、現在韓国において問題となっている就学前カリキュラムの画一化（教育課程の編成・運営の自律化政策の限界）の背景にある「プログラム（専門研究者によって開発されるカリキュラムモデル）」方式に着目し、教育・保育内容にかかる政策の史的展開におけるプログラムの開発・普及の位置づけ、国レベルの教育課程におけるプログラムの構造、園レベルのプログラム実践にかかる保育者の意識等について、文献資料と現地調査により検討し、プログラムの開発・普及による現状と課題を検討したものである。
審査委員	(主 査) 教 授 浜口 順子	第1章では1945年から現在までの韓国の教育・保育政策の発展過程を5期に分けて検討し、韓国は標準化された教育・保育内容を含む課程と、具体的な教授法を内包するプログラムを開発普及させるという2つの戦略を一貫して採用してきたことが明らかとなった。第2章では6種類の教師用指導書の変遷の中で、主題中心統合という編成原理をもつ国レベルの教育課程が保育者による多様な適用を制限する構造を持つことがわかった。第3章では大学の教材と政府刊行物を分析し、園独自の方針や目標設定、保育者レベルの教育課程の開発への意識が低いことが示唆された。第4章では、「生態幼児教育」の保育論を検討し、主題中心統合課程とは異なることが示された。第5、6章ではそれぞれ質問紙調査、インタビュー調査により生態幼児教育の保育者の国家的教育課程への意識について検討され、プログラムが保育者に内面化され、自由な保育を規制していること、一部には遊びや生活を重視し「脱プログラム」の考えもあることがわかった。 結論としては、韓国の保育者は主題中心統合を編成原理とする国レベルの幼児教育・保育課程（ヌリ課程）に沿って主題を作成し活動を展開する役割をにない、近年普及してきた生態幼児教育プログラムを実施する園においても、制約としてのプログラムを自ら求め実践手段とする「プログラムの内面化」が認められ、プログラム開発・普及様式と保育者の意識、価値観との関連性が明らかとなった。
	(副 査) 教 授 小玉 亮子	
	(副 査) 准教授 刑部 育子	
	(審査委員) 教 授 浜野 隆	
	(審査委員) 助 教 松島 のり子	
	(審査委員)	